

早稲田大学 教育学部 国語 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク式・記述式併用
試験時間	90分(現代文1問、現漢1問、古文1問)
難易度	昨年より難化

〔大問別講評〕

(一) 評論文。「芸術の定義」について。出典:小沼純一『介入する言葉、芸術へと』。

《本文字数:約 3500 字＝昨年より約 400 字増加。設問数:10＝昨年より1問増加。》

小問	難易度	コメント
問一・a	標準	【漢字書き取り】「昇華」でないことを文脈判断する。
問一・b	やや易	【漢字書き取り】このレベルの漢字はできるようにしておきたい。
問二	やや易	【傍線部理解】傍線Aの直後の2行の内容から考える。
問三	やや難	【理由説明】前後の文脈から判断する。ウは主部の表現が不適切。
問四	標準	【脱文挿入】直前には脱文と逆接の関係になる内容があるはず。
問五・C	やや難	【空欄補充】空欄Cの1行後の「対立」という語がヒントになる。
問五・F	やや難	【空欄補充】空欄Fの前後各2行から判断する。
問六	やや易	【傍線部説明】傍線部と選択肢を照合すれば容易に判断できる。
問七	難	【傍線部理解】オが紛らわしいが、言葉は「芸術の」ではなく「自らの」外部にあるものと傍線部にある。
問八	やや易	【理由説明】傍線Gの直前3行の内容から選択できる。
問九	標準	【傍線部説明】傍線部、及び、その直前部分と選択肢を丁寧に照合する。
問十	やや易	【内容合致】紛らわしい選択肢がない。

(二・甲) 随筆文。「旅」について。出典:谷崎潤一郎『旅のいろいろ』。

《本文字数:約 3300 字＝昨年より約 500 字増加。設問数:9＝昨年より1問減少。》

問十一	易	【漢字】「幽谷」は「奥深い谷」、「物色」は「探し求める」という意。
問十二	やや難	【空欄補充】空欄Aの6行後と10行後より。「人界」と迷うも、空欄直前の表現から判断する。
問十三	やや難	【空欄補充】空欄Bの直前の二つの表現と並立させるにふさわしい語句を探す。
問十四・C	易	【空欄補充】「～にまみれた」という直後の表現にふさわしい語を選ぶ。
問十四・E	やや易	【空欄補充】空欄Eの直前の表現から判断することはたやすい。
問十五・3	やや難	【語句の意味】正確な意味を知らないと正解できない。
問十五・5	やや易	【語句の意味】「桃源郷」＝「理想郷」という表現は知っておきたい。
問十六	易	【傍線部説明】傍線4を含む段落の第一文から容易に内容がつかめる。
問十七	標準	【整序問題】「イ→エ」が続き、「ウ」で話題を変えている。
問十八	やや易	【傍線部理解】最終段落の趣旨がつかめているか。
問十九	易	【文学史】近代文学史の基本知識が問われている。

(二・乙) 漢文。出典:『本朝文粹』都良香「富士山記」。

《本文字数:約 160 字＝昨年より約 110 字増加。設問数:5＝昨年より1問増加。》

小問	難易度	コメント
問二十	易	【知識問題】「駿河国」は、現在の静岡県の一部。
問二十一	標準	【字義の説明】Aは「歴覧」で「一つ一つ目を通すこと」の意。Cは文脈でも容易に判断できる。
問二十二	やや易	【返り点】「於」に着目し、傍線部が比較形であることを見抜く。
問二十三	標準	【書き下し文】傍線部の「従」は返読文字で「より」と読む。
問二十四	やや易	【文脈把握】直前の「十一月五日」と傍線部の「午」がヒント。

(三) 古文。出典:『蜻蛉日記』。

《本文字数:約 1200 字＝昨年より約 150 字減少。設問数:10＝昨年より 1 問増加。》

問二十五	標準	【主語判定】ロがやや難しい。文脈を正確につかめているかどうか。
問二十六	標準	【文脈把握】傍線部の「おぼろげに」、及び、「かく」の指示内容から判断する。
問二十七	標準	【文脈把握】直前の内容から判断する。「いきあひては悪しからむ」の意味をつかめたか。
問二十八	やや難	【文脈把握】「十字以内」という条件が手がかり。
問二十九	やや易	【文脈把握】直前の夫(兼家)のセリフから判断する。
問三十	易	【記述・口語訳】「聞こえ」は「申し上げる」、「て」は強意、「む」は意志。
問三十一	易	【文法問題】傍線部は、断定の「なり」の撥音便の無表記。
問三十二	標準	【文脈把握】傍線部までの内容を正確に把握できたかどうか。
問三十三	易	【知識問題】いずれも基本古語。
問三十四	やや難	【文脈把握】作者の心情と直前の夫(兼家)のセリフから判断する。

〔総合コメント・今後の指針〕

昨年と比べて、本文の字数と設問数がやや増加した。また、昨年よりも大問二の随筆文が難化したため、全体の難易度も難化したといえる。昨年同様、大問一の評論文が難しいので、ここで時間をとられすぎると大問二と大問三で思わぬ失点をしたかもしれない。大問一は後回しにするのが得策であろう。

大問一は、「芸術の定義」についての評論文。分量は昨年より約 400 字増加し、一昨年並みになった。内容も易しくはないため、読みづらく感じた受験生が多かったかもしれない。制限時間に追われて焦ることなく落ち着いて傍線部と選択肢を照合できたら、ほとんどの設問は解けたであろうが、問七は難問であった。本学部の大問一の評論文では、腰をすえてじっくりと文章を読み込む力が求められている。ふだんから文章を精読する姿勢を崩さずに学習してほしい。

大問二の甲は、「旅」について述べた随筆文。今年の「落語家円朝」についての随筆文よりは難しかった。設問では、問十二、問十三あたりで差がつくと思われる。問十五の「提灯持ち」は知らなかった受験生が多かったであろう。

大問二の乙は、「富士山」について述べた漢文。基本的な設問ばかりなので高得点が望まれる。現役生のなかには受験勉強で漢文まで手が回らないという人がいるだろうが、句形などの基本事項だけでもマスターして、センター試験レベルの漢文はできるようにしておきたい。

大問三の古文は、『蜻蛉日記』。本校でも一学期の『早大古文 PART I』の〔五〕などで扱った頻出出典だが、設問がやや難しめであった。頻出出典に関しては、登場人物の関係や人柄を受験生が把握しているという前提で出題されることが多いため、文学史の学習も怠らないようにしたい。